

## 関連学会印象記

# 第9回日本心臓血管麻酔学会 第9回国際心臓血管麻酔学会

野村 実\*

第9回日本心臓血管麻酔学会および第9回国際心臓血管麻酔学会は、2004年9月9日～12日 慶応大学 武田純三会長のもと、東京ホテル日航で開催された。本大会はいろいろな意味で話題性と特色の多い学会であった。

本学会は、国際性と継続性を前面に打ち出した学会であるが、併設された第9回国際心臓血管麻酔学会は米国心臓麻酔学会の協力のもとにプログラムが生まれ、心臓麻酔にかぎらず米国、ヨーロッパの著名な麻酔科医が一同にかいする文字どおりの国際学会であり、米国の(CME credit)を取得したことからもこの学会の質の高さが伺われる。わたくしが知る限り、CME credit<米国の生涯医師教育>を取得した国際学会はあまり聞いたことがなく、これをとる過程には5年前より学会企画を用意して、米国のfacultyと議事録をminuteとして毎回提出するという、気の遠くなる作業を行っていたと聞いている。したがって、今回外国からの参加者も多く、日本の参加者とあわせると予想を上回る約730名で、海外からの参加者が約4分の1を占め、盛会裡に終了した。

今回の武田会長のテーマは心臓麻酔の安全性と教育であり、その教育講演やシンポジウムはそれぞれに圧巻であり、米国だけではなくヨーロッパ、アジアの主要な麻酔科医が集結した学会であった。それぞれの内容を収録する出版を企画中である。

日本心臓血管麻酔学会で継続して行われている経食道心エコーワークショップはさらに進化し、基礎編と応用編が各2つのセッションで構成され、欧米の参加者も加わりさらに内容が充実した。丘

先生、尾本先生とTEEを世界に発信したおふたりが司会にはいり、内容的にも非常に高度であるがわかりやすく解説されており、DVDに収録されて発売されると聞いている。

人工心肺ワークショップもその規模と内容は確実に拡大しており、人工心肺やPCPS回路などの実技を通じて、心臓麻酔に十分な人工心肺の知識と技術習得を与えていた。麻酔科医もこのような周辺知識を習得すべき時代が来たことを予感させ、心臓外科医、人工心肺技師などとのより緊密な連携の必要性を再認識させる実習であった。

もうひとつの大きな特徴は最終日で行われた経食道心エコー試験(JBPOT; Japanese Board of Perioperative Transesophageal Echocardiography)であり、300名以上の受験希望者があり、急遽会場を拡大して対処したと聞いている。これは、長年にわたって日本心臓血管麻酔学会がTEEを通じて、麻酔科医にその必要性和診断医としての麻酔科医への啓蒙を行ってきた大きな成果であると痛感し、心臓麻酔専門医の布石のひとつとなると考えられる。この試験は、NBEでの問題検討や海外の専門家と試験内容や認定作業を共有化することを目的としているため、英語での問題も同時に作成された。当初米国のNBE(National board of Echocardiography)を誘致することを考えたようであるが、費用的また言語的にも難しく、日本でのこの試験を英断された武田会長および試験委員の先生がたに深い敬意を評します。JBPOTも機構的には日本心臓血管麻酔学会と独立して、さらに経食道心エコーの実務経験や高度な知識を加えた、経食道心エコー認定医につながると考えられ、来年9月の岡山での日本心臓血管麻酔学会にJBPOTの2回目

\*東京女子医科大学麻酔科学教室

が行われることが決定している。

JBPOT 受験は来年も日本語、英語での両方も可能であり、受験の可否だけではなく、TOEIC 方式で点数を加算するための再受験など、合格した人に対しても、認定用件を含めた様々な運用が行われることが討議されている。また不幸にして不合格の先生にも、どこの分野の点数がよくなかったかの個人ごとの集計が通達される予定で、今後の TEE workshop では自分の不得意部分をとくに学習していただくような配慮がとられるようである。今後、日本心臓血管麻酔学会の homepage でいろいろな TEE workshop の情報が公開予定である。

会員懇親会では、国外と国内の一般演題に対して、それぞれ会長賞と学会賞が送られ、国内の受賞者には来年米国での心臓麻酔学会への旅費への補助が行われる予定である。また、余興?としてだされたおみこしの熱気はすさまじく、この学会の会員の熱意が伝わるほど興奮した内容であった。<よく遊びよく学べ>という昔の言葉が思い出される、楽しい学会であった。

今回は日本の学会と国際学会の共通開催であり、運営面で非常に難しい学会であることが推察される。一般演題も英語での発表であり、会員の先生とくに若い先生にはハードルが高かったようである。ただし、座長の先生は海外と日本の先生のペアとなっているので、比較的すみやかに充実した討論が行われていた。ランチオン、イブニングセミナーも英語(一部同時通訳)での発表であり、英

語づくしの学会であった。筆者もランチオン(小児 TEE)の演者が急にキャンセルとなり、1時間の英語の発表が余儀なくされたが、時間がすぎていくのが待ち遠しかった。

医療機器や薬剤メーカーの機器展示も楽しみの一つであるが、海外からの先生が多く、あわてて英語対応の人員を増加するメーカーも見受けられた。一般的な国際学会と違い、海外の先生も真に勉強に来ているかたも多く、各演題や学会参加に対する意欲がひしひしと感じられた。

本学会は2005年9月の岡山(森田 潔会長)では従来の日本心臓血管麻酔学会となり、2006年は長崎大学 澄川教授、2007年は福岡の秦先生と決定されている TEE workshop の内容もさらに upgrade されるようで、日本心臓血管麻酔学会会員を対処として、従来の講義形式に加えて、豚の心臓を使用して解剖を学ぶ wet lab や実際に動物で実技を行う animal lab などが予定されている。また、TEE をこれから学ぶ人のために、初心者向けの TEE 講座も強化予定であり、詳細は [www.jscva.org](http://www.jscva.org) または学会事務局(JSCVA <[jscva@anes.twmu.ac.jp](mailto:jscva@anes.twmu.ac.jp)>)にお問い合わせ下さい。

先年亡くなられた、本学会を楽しみにされて努力されていた藤田昌雄先生(日本心臓血管麻酔学会前理事長)の意志を実現した本学会を開催された武田会長、慶応大学医局員や事務局の方々に感謝いたします。